一人ひとりが目ざめるときです！

対談

村上和雄 × 木山啓子

筑波大学名誉教授　　ジェン事務局長

「自分に何かできることはないか」。未曾有（みぞう）の大震災に遭（あ）い、多くの人が、いま、自分のいる場所で少しでも役に立つことはないかと考えはじめています。遺伝子研究の第一人者である村上和雄さんと、震災直後から被災地で支援活動を続ける特定非営利活動法人ジェン事務局長の木山啓子さんが「いま私たちにできること」を語り合いました。

祈りの力

村上　僕は長年「心と遺伝子」の研究をしてきましたが、なかでも、人の心の中に「祈り」があると信じてきました。「祈りには力がない」という人がいるけれど、僕は、祈りに力がないのではなくて、「祈りを忘れた心に力がない」と思っているんです。今回の震災をきっかけに、あらためて僕は「祈りの力」の復活というものを感じずにはいられないんですよ。日本のために世界中の人が祈りを捧げている。世界の各地で祈っている人がいる。わざわざ日本に来て祈ってくださる人もいますからね。

木山　震災後、相次いで外国の方が日本から去っていくなかで、世界的指揮者のズービン・メータ氏が来日されました。私自身は被災地にいたのでコンサートには行っていないのですが、メータ氏の、音楽で何とか日本人の力になりたいという気持ちにすごく励まされました。

私は、祈りとは止むに止まれぬ気持ちの「発露（ほつろ）」だと思っています。今回、被災地にうかがって被災された方のお話をたくさん聞かせていただいたのですが、その中に、自分が命がけで避難したあと、目の前で津波に流されていく人が「助けて」と叫んでいた、その声がいまも聞こえるという方がいました。そうした方を目の前にして、私はかける言葉も見つかりませんでした。そんな中でも、なんとか私にできることをさせていただきたいと願っていて、その気持ちが「祈り」かと思うんです。歌が得意な人だったら、人の心を癒（いや）したいと願って歌った歌そのものが祈りかもしれないし、私のような仕事なら、温かい気持ちで物資をお渡しすることが祈りなのかもしれません。

先ほど村上先生が言われた「祈りを忘れた心に力がない」というお話にすごく刺激を受けました。同じ言葉一つとっても、祈りを持たない言葉は相手に誤解されたり傷つけたりすることがあると思います。逆に、祈りを持った行動は、いろいろな人に感動を与え、人を励まし、一歩踏み出せる力になるのだと思います。村上先生の本に多くの方が感動するのも、きっと先生ご自身が「書く」という行為に祈りを込められているからではないでしょうか。だから私は、どこかに座って祈りの言葉を口にするだけが祈りではないと感じているんです。

村上　感動は「感じて動く」って書くでしょ。「知動」とか「理動」という言葉はないからね。理屈や知識では人は動かない。感じないと動かないんですよ。心に湧いた祈り、感じたものを一人ひとりが何らかの形で外に表わすことで、世界が変わると信じています。

２００６年に広島国際平和会議が開かれ、ダライ・ラマ十四世をはじめ三人のノーベル平和賞受賞者によるサミットが行なわれました。僕は議長を務めたのですが、「共同宣言」が素晴らしい。『問題が起こる原因、それは私たち自分自身にあります。そしてその解決もまた私たち自身からはじまり

プロフィル● きやま けいこ
1994年、ジェンの立ち上げから参加。旧ユーゴスラビアの難民・避難民支援活動では、紛争中から6年間現地統括責任者を務めた。現在も、アフガニスタン、イラク、スリランカ、パキスタン、南部スーダンなどで紛争、災害の被災者の自立支援を続けている。『日経ウーマン』誌ウーマン・オブ・ザ・イヤー 2006大賞受賞。特定非営利活動法人ジェン理事兼事務局長。特定非営利活動法人明るい社会づくり運動理事。著書に『誰かのためなら人はがんばれる―国際自立支援の現場でみつけた生き方』（かんき出版）。

ます。（中略）世界を変えるのに必要な力、それはそこにあります』。全人類が一斉に変わるのは無理でも、祈りを行動に表わす人が少しでもいたなら、世界は必ず変わると信じています。

いまこそ気づいて行動を

木山　今回は震災に加えて、原発の問題も深刻です。原発の問題に直面したことで、直接、被災していない人でも、自分自身の問題として考えやすい状況にはあると思うんですね。「これがチャンスです」と言いきってしまうのは、犠牲になられた方に大変申し訳ないことなのですが、「チャンスに変えていかないと申し訳ない」という気持ちがあります。

村上　僕も同感です。多くの犠牲に報いるには、自分たちの生活を見直す以外にはない。僕は、今回の震災はあれほどの犠牲をはらってまで伝えようとした、サムシング・グレート（偉大なる何か）からの痛烈なメッセージだと思います。生きている環境も、才能も、魂も違う私たち一人ひとりが自分に課せられたメッセージを読み解くことが大事です。

僕は、今回、人類に対するイエローカードが出されたと思っているんです。人間の傲慢（ごうまん）さ、科学・技術の傲慢さに対する警告です。

地球は人間のためにあるわけではありません。地球誕生から四十六億年の歴史のなかで、われわれ人類の歴史はほんの二十万年です。ごく最近出てきた人間が石油などの資源をわがもの顔で使っていながら「地球に優しくしましょう」って、それは傲慢ですよ。わ

れわれは傲慢さに慣れてしまいました。水が出るのは当たり前、電気がつくのは当然のこと。しかし今回のことで「当たり前」ではないことが身にしみて分かった。これまで地球がわれわれに優しくしてくれていたんですよ。今回、まだチャンスを与えてくれているのだから、いまこそ、一人ひとりが気づいて行動を起こすときだと思います。

木山　おっしゃるとおりです。先進国であるがゆえの傲慢さでもあると思います。今回、ジェンは宮城県の石巻で支援活動を行なっているのですが、潮の影響で農業の復活も見込めない、漁業を再開するには、海のがれきを除いて、港を直し、船が戻ってきて、ようやく実現するのですが、地盤沈下が七十八センチも進んでいて、もと通りの港にすることはできません。

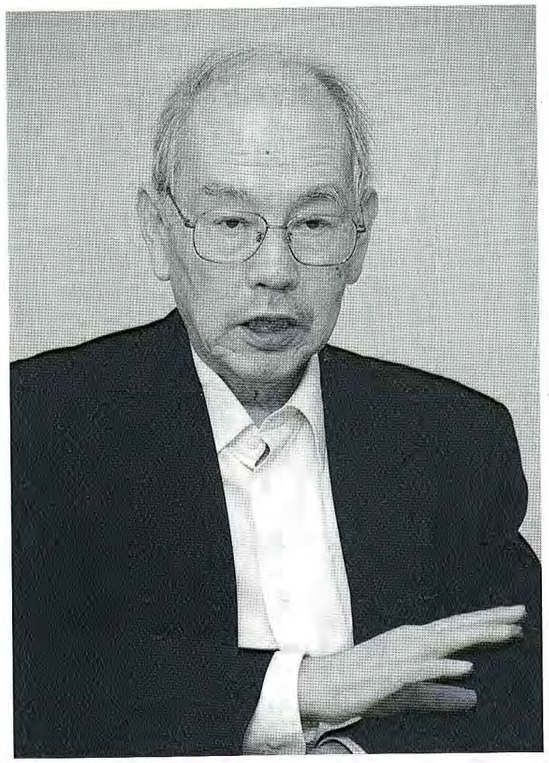
従来どおりの農業復活、漁業復活が困難な今、だからこそ、自然と共生していく新たな形を生み出さなければならないと思っています。

村上　今回、被災された方が天を恨んでいない。そういうところが日本人の素晴らしい姿だと思うんですよ。

木山　東北の方の素晴らしさでもあるのではないでしょうか。常に自然と共生してきた人の生き方には忍耐強さがあります。

村上　本来の日本のよさが東北に残っているのかもしれないね。あそこが素晴らしい未来都市になって世界にモデルとしての姿を示していくことが、サムシング・グレートからのメッセージを読み解く鍵になるかもしれません。

木山　そうなるように私も頑張ります。



プロフィル● むらかみ かずお
1936年生まれ。京都大学大学院卒。78年、筑波大学応用生物化学系教授に就任し、83年、高血圧の黒幕である酵素「レニン」の遺伝子解読に初めて成功。ＤＮＡ解明の世界的権威。国際科学振興財団バイオ研究所所長。筑波大学名誉教授。特定非営利活動法人明るい社会づくり運動顧問。著書に『人は何のために「祈る」のか』（祥伝社）など多数。4月には『人を幸せにする「魂と遺伝子」の法則』（致知出版社）を上梓した。

楽しく続ける自分にできること

村上　今回、木山さんはどれくらいの期間、被災地に行っていたんですか

木山　私自身は二週間くらいです。ジェンの被災地での活動は十年は続ける覚悟です。

村上　すごいなぁ。今回の場合は確かに長期的な支援が大切ですからね。木山さんを突き動かしているものはなんですか。

木山　楽しいからです。自分にできることがあるのに、やらないでいることが気持ち悪いという感じです。

村上　楽しい境地になればいいんだ。

木山　楽しいといってもルンルン気分ではないですよ。特に今回は、被災者の方とお話ししているうちに同化してしまい、私自身もこんなに落ち込むんだな、と痛感しました。子どもを三人いっぺんに津波で亡くされたお母さんがいて、そのことを淡々と話されるんです。自分の悲しいという気持ちをブロックしているんですね。そんな方に何をしたらいいかなんて分かりませんよね。だからこそ、先ほどの「祈り」の話ではないですが、真心を込めて考えるしかないのです。そんな思いを持ち寄って一緒に考える仲間がいたら、なおいいと思います。

村上　ボランティアも増えていますね。

木山　はい。しかも今回、ボランティアの質もあがっていると感じています。以前は、「自分が人から必要とされたい」という、自分探しのような人にも出会いましたが、自分の頭で考えて人のために行動する人が増えてきました。そもそも現地があまりにも厳しい状況なので、根性がないとできないということもあるのですが。

村上　それはいいことですね。

木山　人の役に立つことを現場で考え、実践できる人が増えたと思います。私自身、誰かの役に立っていると思うと、その人が今日は温かく過ごせていると思えただけでうれしいんです。だから、人のためじゃなくて自分のためです。

村上　だからといって、すべての人がボランティアに行けるわけではないから、とにかくこの機会に、われわれは一割でも二割でも、消費エネルギーを削減することを自分で決めるべきですよね。義務でやることや無理なことは続かないから、一割、二割の節約を習慣化して、できれば、その中に楽しみとか喜びを見いだせたら続くと思うんですね。

「教えてください」じゃなくて、自分で決める。そのうちにそっちのほうが快適になるかもしれませんよ。

木山　そうですね。私は最近まで「三

月十一日に思い出すのでは足りないから、一のつく日には何かやると決めたらどうでしょう」と提案していたのですが、いまは「忘れない方法を自分で考えたらどうでしょう」と提案したいんです。自分に合った方法のほうが定着するし、広まると思うんですね。

村上　人生や研究には模範解答がないからね。特にいまモデルがない事態に直面して、こういうふうにすれば国がよくなる、国民みんなが幸せになる、こういう生き方が幸せになるんだという新しいモデルを世界に示していく使命が日本にあると思うんですね。

　すでに世界が日本のよさを見直していて、日本にいる私たちだけが分かっていない。日本人が持っている「おかげさま」とか「ありがとう」「もったいない」。そういう心を私たちが忘れかけていたことに対する「目ざめなさい」というメッセージとも受け取れますよ。

木山　節約や復興支援をするための楽しいアイデアみたいなものを皆で出し合えば、きっと、そこからさらにいい方法が見つかると思います。

村上　いいね。人間は強制されなくたって、楽しいことはやるからね。現地で動いている人の提案は素晴らしい。

木山　先ほど村上先生が言われたように、誰もやっていないモデルを作るのですから、皆で考えて、よくしていきたいですよね。

村上　そう。イキイキワクワクが大事なんですよ。私も自分の研究が世の中の役に立っていると思うから、楽しくてやめられないんです。いま、私たちは自分がしていることが多くの人のために役立っていることに目ざめるときが来ているんです。自分の些細な行ないが、他の人のためになっている、そういう楽しみをお互いに味わっていきましょう。

※『やくしん』では、「いま私にできること」をテーマに、楽しくて継続的な節約アイデアを募集します。詳しくは七十四ページで。